

概要

R3.1.26の中教審答申では「生徒の学習意欲の低下」が危惧されている。本校の子供の実態からも教科に対する意欲の低下がうかがえた。その課題を解決するために、国語でつけた力が生きて働く力であることを理解させ、学びがいを実感させたいと考えた。そのためにはつけた力を発揮する場が必要だと考え、**カリキュラム・マネジメント**の在り方を探る実践を行った。まず、9年間の系統性を踏まえて、単元のつきたい力を整理したことで既習の力と単元でつきたい力を明確にすることができた。次に、「何ができるようになるのか」を明らかにし、学びに対する「願い」をもたせることで意欲を向上させることができた。また、**教科間等を関連**させた導入と出口は単元でつけた力を実感させることができた。そして、単元で付けた力を**教科横断的に**活用させたことで汎用的な力として定着させることができた。最後に、さらなる可能性を探るため、**一人一台端末**で個別最適な学びとつなげたり、**GIGAスクール構想**のよさを生かして遠隔の仲間と学び合ったりする実践を行った。実践は第2学年と第3学年で行った。

1 研究テーマの設定の理由

(1) 中教審から

まず、令和3年1月26日に中央教育審議会（第228号）の答申『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～の「2020年代を通じて実現すべき『令和の日本型学校教育』の姿」には「一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようその資質・能力を育成すること」が求められている。その課題として「生徒の学習意欲の低下」が挙げられており、この要因を解決するために考えられることは子供の知的好奇心を最大限引き出すことではないかと考えた。また、同答申Ⅱの2.「9年間を見通した新時代の義務教育の在り方について」の（2）「教育課程の在り方」にはカリキュラム・マネジメントの充実に向けた取組の推進が挙げられており、「各学校や地域の実態を踏まえ、教科等間のつながりを意識して教育課程を編成・実施」することが求められている。これらのことから、教科等間につながりを意図的にもたせ、どのような場面でも身に付けた力が発揮できる実感をもたせること

ができれば生徒は意欲的に学習に取り組むことができ、その中で自分のよさや可能性を認識できるのではないかと考えた。

(2) 岐阜県教育振興基本計画から

岐阜県教育振興計画（第3次岐阜県教育ビジョン）では、「自立力」「共生力」「自己実現力」が挙げられており、これら「3つの力の融合により、一人一人の優れた才能や個性を伸ばし、さらにそれを磨きながら、未来に希望をもって生涯を生きる力」の育成を目指している。その実現を目指し、教科横断的にカリキュラム・マネジメントを行うことで、主体的に学び、多様性の中でも自分の個性を発揮して様々な可能性に挑むことができる活動を積み重ねることができれば子供たちは充実感や達成感を味わうことができ、未来に希望をもって生涯を生きる力を育むことになるのではないかと考えた。

(3) 子供の実態から

「令和4年度全国学力・学習状況調査（質問紙）」の本校の国語科に対する回答を見てみると「その教科の勉強は好きですか」という質問で「当てはまる」または「ほぼ当てはまる」と答えた子供は56.9%で57.1%の県61.9%の県、全国共に下回っている。「その教科の授業の内容はよくわかりますか」には本校87.3%県80.1%全国81.2と県、全国を上回っている。「その教科の授業で学習した

ことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか」という質問に対しては本校 86.3% 県 88.9% 全国 89.7% と県、全国を下回っている。この結果から、本校の国語科の指導は学習を理解させることは平均正答率が県や国より高いことから概ねできているといえるが、学びに対する意欲と意義を感じさせることに課題があることが明らかになった。そこで、子供が学ぶ必然を感じ、国語で付けた力を様々な場で発揮し、汎用的に活用していく体験を積み重ねれば、未来に生きる力として子供は意欲と意義を感じながら学ぶことができるのではないかと考えた。

中教審と岐阜県教育振興基本計画、子供の実態から、国語で付けた力が将来社会で生きて働く力であることを実感できるカリキュラム・マネジメントを仕組み、子供に国語の学びがいを実感させたいと考え、研究主題を以下の様に設定した。

**国語の学びがいを実感する
カリキュラム・マネジメントの在り方
～「プレゼンテーション」と「合意形成」の
活動を通して～**

2 研究仮説

カリキュラム・マネジメントを行い、学ぶ必然や身に付けた資質・能力を発揮する場を設定すれば、子供は意欲と意義を感じながら学びに向かい、生きて働く力として汎用的に活用するようになるだろう。

3 研究内容

(1) 教科等間につながりをもたせた単元構想

前提 既習内容の活用を実感する系統的な「つけたい力」の設定と共有

①「願い」をもたせるカリキュラム・マネジメント

②つけた力を反復・活用するカリキュラム・マネジメント

(2) さらなる可能性について

GIGA スクール構想による支援、遠隔授業

4 研究実践

(1) 教科等間につながりをもたせた単元構想

以下第2学年単元「魅力的な提案をしようー資料を示してプレゼンテーションをする」(光村図書)(以下「プレゼンテーション」)と第3学年単元

「合意形成に向けて話し合おうー課題解決のために会議を開く」(光村図書)(以下「合意形成」)の実践を通して研究実践について述べる。

前提 既習内容の活用を実感する系統的な「つけたい力」の設定と共有

国語で付けた「話すこと・聞くこと」の力は日常の中で生きて働く力として活用されなければ本当の定着とは言い切れないと考える。そこで、9年間の系統性を明らかにし、新たな学びの中で既習事項を生かすことが必要だと考えた。

「プレゼンテーション」の実践を行うに当たって、思考、判断、表現力等の「A 話すこと・聞くこと イ構成の検討、考えの形成」と「A 話すこと・聞くこと ウ表現、共有」について既習事項を整理し、単元でつけたい力について吟味した。子供たちはこれまでに、小学校で「話の内容が明らかになるように構成する力」「資料を活用するなどして自分の考えが伝わるように表現を工夫する力」、中学校第1学年では「話の中心的部分と付加的な部分などの関係などに注意して、話の構成を考える力」「相手の反応を踏まえながら自分の考えが分かりやすく表現を工夫する力」をつけている。第2学年の「プレゼンテーション」では「自分の立場や考えが明確になるように、根拠の適切さや論理の展開などに注意して、話の構成を工夫する力」「資料や機器を用いるなどして、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫する力」から立場や考えを明確にすることや適切な根拠を示すこと、論理の展開を工夫すること、機器を用いることが新たな学びだということが明らかになった。そこで、第4時に重点的に構成を考える学習過程を設定するとともに、第4時のねらいを「プレゼンテーション機能を用いた岐阜市をPRする発表について互いの発表を聞き、より相手に分かりやすく伝えるためにはどのような順番で話したらいいのかを議論し合う活動を通して、相手に自分の主張を分かりやすく伝える論理の展開を理解することができる。」とした。さらに、生徒会選挙のプレゼンや新入生に向けて学校生活の紹介など、本単元が今後の生活の中でどう生かされていくのかを子供と共通理解することで意欲をもたせた。また、単元を貫く課題を子供と共に考

え「岐阜のよさについて、その根拠を明らかにしながら話の構成を考え、資料や機器を用いて紹介しよう。」と設定した。

第3学年「合意形成」では、子供たちに、これまでの「話すこと・聞くこと」の学習で付けた力を発表させた。子供たちからは第1学年や第2学年の教科書（光村図書）にある「話すこと・聞くこと」の話し合うことから「目的や話題を捉えながら話し合うこと」「互いの発言を結び付けて考えをまとめること」「互いの共通点や相違点を明らかにしながら発言すること」「互いの立場や考えを尊重しながら話し合うこと」が挙げられた。それを基に本単元でつきたい力を「進行の仕方を工夫したり互いの発言を生かしたりしながら話し合い、合意形成に向けて考えを広げたり深めたりすること」とし、子供と共通理解した。また、多くの提案から学級全員で一つの結論を出すために合意形成に向けて話し合う単位時間のねらいを「合意形成に向かう活動を通して、共通点や相違点を捉え、誰もが共通している点を生かすことで建設的に話し合えることに気付き、全員が納得する結論へ導くことができる」と設定した。話し合いの中では、本時の課題だけでなく、既習事項を提示して話し合いを行うことで、意識的に相手の発言とつなげて話す姿や、話題がずれた時に目的に沿って話題を戻す司会者の姿、相手の考えを一度受け入れてから自分の意見を話す子供の姿につながった。また、相手を納得させるために第2学年で学んだプレゼンテーションで付けた力を生かして意見を述べるなど、積極的に身に付けた力を活用しようとする姿を生み出すことができた。（写真1）



<考察>

9年間の系統性を明確にし、既習事項を発揮できるようにしたことが、それまでの学びを生かし続ける子供の姿につながったと考える。このように、新たにつける力と今自分が活用できる力を明確にした上で、教科横断的にカリキュラム・マネジメントを仕組めば、つけた力を汎用的に生かせ、新たにつけた力も今後生きて働く力となることを子供は実感できると考えた。

①「願い」をもたせるカリキュラム・マネジメント

第2学年「プレゼンテーション」では、本校の2年生が総合的な学習の時間に行っている「地域学習」と関連させて「岐阜市の魅力を伝えたい」という目的意識をもたせた。次に「誰に伝えるのか」という相手意識をもつことで伝え方が明らかになる。さらに、今回の発表を通して「相手に岐阜市に興味・関心をもたせたい」という願いが主体的に学びに向かう姿につながると考えた。そこで、岐阜市について学ぶために岐阜市で宿泊研修を行う本巣市立根尾学園第7学年の生徒を本校に招き、そこで岐阜市を紹介することを単元の出口とした。子供たちは自分たちから学ぼうとする違う地域の下級生のために総合的な学習の時間にも積極的に取り組むようになった。また、総合的な学習の時間に集めた資料を自主的に準備して国語科の授業に臨むようになった。このことから、目的や相手意識を明確にし、願いをもたせることで、本単元の指導内容である資料や機器を用いるなどして、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫する資質・能力の習得に向けて主体的に学びに向かう姿をつくり出すスタートとすることができた。

第3学年「合意形成」では本校の3年生が総合的な学習の時間で行っている平和学習の一環である「コートジボワールを支援する活動」とつながりをもたせて単元の出口を設定した。より多くの人にも支援活動に参加してほしいという子供たちの願いのもと、学級担任と綿密に打ち合わせを行い、子供たちに「話し合う必然」をもって単元の学習に取り組めるようにした。しかし、話し合う意欲を高めることは、資質・能力を高めたいという願いをもたせることにはつながらない。そこで、学級活動などでこれまでに行った話し合い活動の課題を単元の導入で想起させ、「学活や帰りの会の話し合いで違う考えが出た時に結論を出すのが難しい」という課題が明らかにした。これを単元構想に位置付けることとした。（図1）

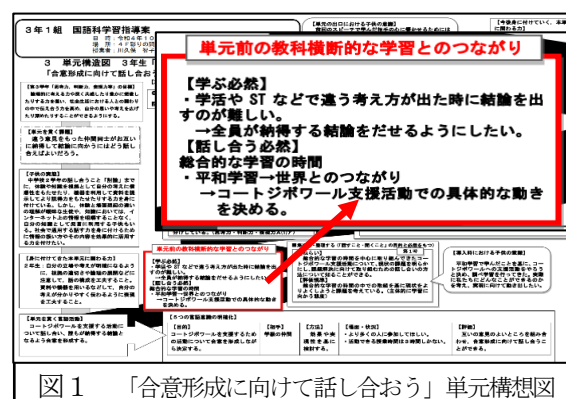


図1 「合意形成に向けて話し合おう」単元構想図

[illegible]

＜考察＞

話し合い活動においては、話し合う内容としての必然と学ぶ必然の両方が必要だと今回の実践を通して実感した。話し合う内容に対する意欲が高まる程、一人一人の譲れない思いが表出する。だから

②つけた力を反復・活用するカリキュラム・マネジメント

4

題解決のために会議を開く」では、より計画的に単元で付けた力を他教科や他の教育活動でも生かせるように、単元指導計画に教科横断的に資質・

教科横断的なつながり		合意形成する (実質的に話し合いながら学びを深めるものにする)	分類整理する (実質的に話し合いながら学びを深めるものにする)
特別活動		教科横断的なつながり	
特別活動		学びを確かにする	
特別活動		社会科	
特別活動		「模範裁判をやってみよう」 事件、事案について役割分担を行い、それぞれの言い分を基に判断することが出来る。	
特別活動		① これまで過 ② 実現性や効 ③ 実際の活動 ④ 活動を振り返り	① それぞれの ② 事件につい ③ 目撃証言や ながら話し ④ 活動を振り返り

図3「合意形成に向けて話し合おう」単元指導計画

能力を活用できる場を位置付けた。(図3)

このことにより、他教科で働かせる場が明らかになり、比較・検討したり、共通点を基に多くの提案をまとめたりするなど、合意を形成するに至るまでのそれぞれの単位時間で学びの重要性を子供と共通理解しながら学習することができた。また、社会科や特別活動の話し合いの中ではそれぞれの意見の共通点や相違点に着目して意見を述べたり、誰もが共通している点を生かそうとしたりするなど、国語科において学んだどのような力を発揮すれば、課題を解決できるのかを意識的に考えながら話し合いを進める姿を生み出すことができた。

<考察>

単元で付けた資質・能力を教科横断的に生かすことは、その後の生活の中でも子供が身に付けた力を駆使して課題を解決する力へと確かなにつなげることができたと思う。しかし、それは教科単独で考えることは難しい。国語科の学習内容だけでなく、他教科や他の教育活動の学習内容と照らし合わせて考え、それぞれの教科で意図的に活動を仕組む必要がある。だからこそ、全ての教科で協力して身に付けた資質・能力を発揮できる場を年間通して計画しておく必要があると強く思った。

(2) さらなる可能性について

GIGA スクール構想による支援、遠隔授業

第2学年「プレゼンテーション」の実践では、一人一台端末を利用して、プレゼンテーションソフトでの制作状況やロイロノートアプリの録音機

能で録音した発表音声提出させた。学習状況を教師が把握できることで一人一人に適切な指導・支援が可能となり学びの深化につながった。また、各自がプレゼンテーションソフトを操作し、Microsoftteams ソフトを利用して構成を考えて編集させるなど、小集団で協働的に学習を進めた。12月には海洋教育の一環として沖縄県船浦中学校と互いの地域についての交流を試みた。ここで、5月に学んだ「プレゼンテーション」で身につけた適切な根拠や論理の展開などに注意して話の構成を考えたり、相手に分かりやすく伝わるようにプレゼンテーションソフトを利用したりして相手への提案を制作した。そこでは、岐阜市と全く違う環境下で過ごす沖縄の仲間のために、写真を増やしたり、説明にクイズを取り入れたりして相手の理解や興味を引くための工夫を主体的に行う姿があった。また、Microsoftteams で代表として発表するグループのプレゼンテーションを一人一人が確認しながら、ロイロノートアプリの生徒間交流を利用して改善点などを即時的に提案していった。代表で発表するグループは次々に送られてくる提案を基に作業を進めることができ、1学級29人もの意見を効率よく整理しながらプレゼンテーションの制作を行うことができた。船浦中学校との交流当日は日課の中に学年国語を設定し116名の第2学年全員で zoom ソフトを利用してプレゼンテーションを活用した遠隔交流を実現することができた。船浦中学校からの地域紹介を兼ねたクイズには116名の一人一人が MicrosoftForms ソフトを利用して答えるなど、互いの子供たちにとって一人一台端末のよさを生かして国語で身に付けた資質・能力を生き生きと発揮する場となった。

(写真2)

<考察>

一人一台端末を効果的に活用することで一人一人に対するきめ細やかな指導・支援が可能になったと考える。学習の過程では即時的に多くの仲間と協働しながら効率的にプレゼンテーションを作り上げる子供たちの姿が見られ、この方法を用いれば学級だけでなく、他クラスや他の地域と協同



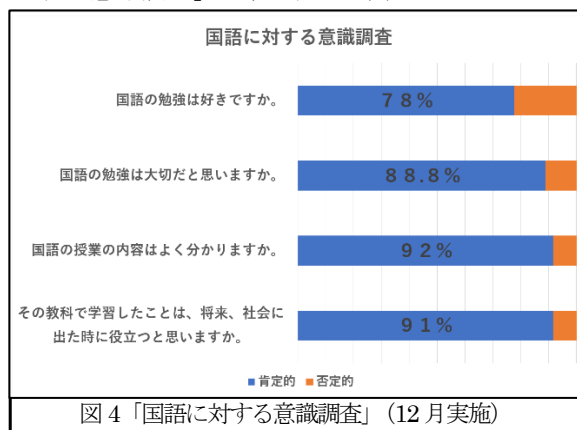
写真2 沖縄県 船浦中学校との交流

して課題解決に取り組むことが可能になったと思った。また、活動に取り組む子供たちの姿から活動の出口として GIGA スクールのよさを生かし、遠く離れた仲間と共に学ぶ機会を設定したことは、目的や相手を強く意識しながらよりよい発表につながりたいという意欲につながったという確かな手応えを感じた。

5 ○成果と●課題

○9年間の系統性を基につけたい力とつけた力を整理したことで、新たにつけるべき力を明確にすることができ、それまでの学びを発揮する子供の姿につながった。

○「何ができるようになるのか」を明らかにし、つけた力を活用できる場をカリキュラム・マネジメントしたことで、全国学力調査の結果よりも国語の勉強が好き 21.1 ポイント、よく分かる 4.7 ポイント、社会に出た時に役立つ 4.7 ポイント伸ばすことができた。この結果から、学びに対する願いをもつことや、付けた力を自己選択しながら活用できる学びがい感じることは、将来に生きて働く力であることを実感させることができたと考えられる。(図4「国語に対する意識調査」3年1組36名)



○単元で付けた資質・能力を教科横断的に生かす場を設けたことで学びの定着につなげることができた。また、汎用的にその力を生かす姿につなげることができた。

○一人一台端末を活用することで、個別最適な学びや協働的な学びを可能にし、快適な通信環境によって、他地域との円滑な交流や学び合いにつながった。

●資質・能力を教科横断的に生かすためには全て

の教科担当が協力して検討する必要がある。

●国語に対する意識調査から国語に対する苦手意識をもつ子供や有用性を感じられていない子供がまだいることが分かった。全ての子供の知的好奇心を引き出し、主体的に学ぶ姿を生み出すために研究を続ける必要がある。

◇ 引用・参考文献

- ・令和4年度全国学力・学習状況調査解説資料(令和4年4月 国立教育政策研究所 教育課程研究センター)
- ・ICT×学級経営 GIGA スクールに対応した教室アップデート(明治図書出版株式会社 2021年8月)
- ・『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(令和3年1月26日中央教育審議会(第228号)答申文部科学省ホームページ)
- ・「学びと生き方を統合する Society5.0 の教育」(株式会社 図書文化社 2020年5月10日)
- ・岐阜県教育振興計画第3次岐阜県教育ビジョン(2019年3月策定 岐阜県公式ホームページ)
- ・「GIGA スクール構想による1人1台端末環境の実現等について」(平成31年3月初等中等教育局 学びの先端技術活用推進室 文部科学省ホームページ)
- ・『中学校学習指導要領解説国語編(平成29年告示)』(平成29年3月 文部科学省)